
迷い夜行

初瀬こより

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷い夜行

【Nコード】

N6291J

【作者名】

初瀬こより

【あらすじ】

この世のどこにもない、夜だけの町。

奇怪なモノで溢れる極彩色の町には異形達が集う。

町の管理者の娘、ユズリは父に認めてもらうため、人探しでこの町を訪れた男の人探しを手伝うことになる。

開幕

日が暮れ、川と橋とが四辻よっじを作る。
袂たもとの柳を越えて橋渡り。

くるり其処から夜の国、異界なり。

静かだ。

小さな町は日が暮れ眠りに就いたかのように静まり返っている。
江戸時代からの風景を残した川沿いの町は、夜になれば細々と灯りがある程度で音と言えは川の流れくらいという、言ってしまうえば寂れた町だ。細い川には古い橋が架かっており、その橋の袂には町並みと同じくらい古い柳の木が一本植わっている。濃い闇と古い町並み。夏場であれば怪談話の一つや二つ持ち上がりそうな場所。そのせいもあって、幼い頃はこの場所が怖くて仕方なかった。父が怖がる娘を見て面白がるというろくでもない悪癖の持ち主だったので、人の多い昼間とて近づきたくなかったくらいだ。

闇に紛れて妖怪があつた橋の向こうからやってくる。

柳の木の下にはお化けが立っている。

この川は三途の川に繋がっているから、夜にこの橋を渡るとあの世へ迷い込んでしまう。

等と散々に話を聞かされたため、とにかくこの場所は苦手だった。今にして思えば、父なりに幼い娘をこの場所へ近づけないためにした親心というものだったのかもしれないが、当時はただひたすらに

怯え、何故父はこつも自分が怖がるような話ばかりするのかと泣きながら恨んだものだ。

懐かしくも恨めしい記憶に思いを巡らせながら柳の木を離れ、橋を歩く。静かな夜に、川のせせらぎと足音だけがよく響いた。

そうして五メートル程の長さの橋を渡りきり、地面に足をつければ静まり返っていたはずの町は喧噪と色鮮やかな色彩とに溢れ返っている。

祭囃子のような高い笛の音色に太鼓の音。賑やかに飛び交う声。吊り下げられた提灯の列。あちこちを飛び交う様々な色の鬼火。この世の賑やかしを全て取り集めたような極彩色の世界。

昼には決して姿を見せぬ町の全貌が露わになる。

町の中心には煉瓦と木製の十二階建ての塔。その屋上には常に煌々と炎が揺れている。そこまで続く大通りは瓦葺かわらぶきの商店や屋台がずらりと連なるが、通りから外れてみれば擬洋風建築風の半端に西洋的な館が建っていたりもする。少し道を外れ歩いてみるといつの間にか提灯ちしやうではなく瓦斯灯がすいとうが道を照らしていることもある。

節操がないと言えばそれまでの、雑然とした光景だ。そしてそれは建造物だけでなく、町を歩く者達にも言える。

瓦葺の店先で酒を飲み交わす人々。怪しげな露天商。店の客引き。その姿は十人十色で、パーカーにハーフパンツという格好で話し込んでいたり、派手な柄の着物の襟元を大胆に広げて談笑していたり、鬚まげを結むすって月代さかやきに灯りが反射している者がいたりと統一性はない。

ここは昼には決して立ち入れない場所。

夜だけの町。

どこにもない町。

賑々しや夜の町

「お姉さん。飴はいらんかい？ 竹とんぼに紙風船もあるよ」

顔の真ん中に大きな目が一つと小さな鼻と口。浴衣を着た子供が両手で持った竹の籠かごを見せながら寄つて来た。籠の中に視線を注ぐと、中には砂糖をまぶした色とりどりの飴玉や竹トンボ、独楽やビー玉などがぎっしりと詰まっていた。しばらく考えて、その中から赤い吹き戻しを一本取り上げる。

「これがいい。いくら？」

「十だよ」

スカートのポケットから四角い銅貨を取り出して子供の手に乗せてやると、子供は大きなひとつ目を細め、にこりと笑った。

「毎度あり。時にお姉さん、名前は？」

「ユズリ」

短く答えると、子供は不満そうに唇を捻じ曲げた。

「何だい。やっぱり素人じゃねえのか」

「残念ながら。狙うならもっと素人素人したのを狙いな」

ユズリは吹き戻しの先で子供の額を叩き、軽く手を振って道の先へと進んだ。素人なんてそうそういるかい、とぼやく子供の声を背に聞きながら。

ピーと音を立て、吹いた先はくると巻きとられて戻ってくる。吹き戻しを吹きながら、ユズリは大通りの店先を冷やかしながら歩いた。そう言えば最近映画だったかテレビだったかで見た、江戸時代の色町は丁度このような雰囲気だったなと思いながら啜えた吹き戻しを吹き遊ぶ。

刀を差した袴姿の男や首が二メートルほどによると伸びた若い女、リング飴片手に笑い合う揃いのワンピース姿の少女達などとすれ違いながら、ユズリはあちらこちらへと視線を遣った。大概

彼は町の中心にある十二階建ての塔に続く大通りの何処かの店で誰かと飲んでいるか話し込んでいるかするのだが、今日はいないのだろうか。

赤や青の鬼火を縁日の綿あめ売りか風鈴売りのように売っている男。二足歩行し、粋に浴衣を着こなした狸たぬきと会話を楽しむスーツ姿の男。訪ね人はなかなか見つからない。

しばらく行くと、少し先の飲み屋の店先で将棋に興じる男二人の姿が目に入った。片方はポロシャツを着て腕を組んだ、四十を幾らか過ぎた男。もう片方はＴシャツにジーンズ姿の若い男。

探し人はずっとここで将棋を指していたらしい。別に待ち合わせをしていたわけではないのだからいいが、こうも人が真剣に探していたのに呑気に見知らぬ男と将棋に興じていたのかと思うと逆恨みしたくもなる。気心の知れた相手だとどうしてこうも理不尽な行動に出たくなるのか不思議だが、今はそれより先にようやつと見つけた訪ね人に一言文句を言ってやりたい。

「ちよつと」

ユズリは有無を言わず吹き戻しで男の肩を叩きつけた。

「私ずっと探してたのに、何こんところで将棋なんかやってるの」
丁度将棋を指していた二人の間に立つ形になったユズリを、二人の男は同時に見上げた。

「おや、ユズリ」

ポロシャツを着た年長の方の男が呑気に顔と声を上げる。

「お前、真剣勝負の最中に何をするんだ？ その上いきなり肩を叩くなんて礼儀知らずな真似はよしなさい」

「うるさいなあ。ずっと探してたのに見つからないのが悪いんじゃない」

ユズリはぷいと男から顔を背けた。

「まったく……お父さんに手を上げるなんてそんな悪い子に育てた覚えはないぞ」

「奇遇だね。私もお父さんに子育てされた記憶は殆どない」

胸を張って言うと、ポロシャツの男ははあとわざとらしく溜め息を吐き、不思議な顔で二人を見ていた真剣勝負の相手とやらに苦笑してみせた。

「ああ、すまないね。うちの娘なんだよ。どうにもこうにも驕がなっていないくてお恥ずかしいが」

「恥ずかしいって何よ。失礼な。それよりお腹すいた。チョコバナナ買って」

ユズリが右手を差し出すと、父はまた盛大に溜め息を吐いた。

「吹き戻しにチョコバナナって……お前はもう十八になっただろうに」

「童心を忘れないように日々努力してるの。あ、やっぱりかき氷食べたい」

店の暖簾の横に『氷』と書かれた旗を見つけ、ユズリは店の奥に声をかけた。

「すみませーん。氷いちご一つ」

「あいよっ」

薄暗い店の奥から威勢の良い声が聞こえてきたのを確認し、ユズリは将棋盤と男二人が座した縁台の手前に置かれたもう一つの縁台に腰を下ろした。

「お父さんは出さないぞ」

「今日はもう手持ちがない。お父さんが払ってくれないと無銭飲食になって私捕まる。私捕まるとお母さんが困る」

早口でまくし立てると、父は渋い顔をして銀色の長方形の小銭を一枚差し出してきた。ユズリはしてやったりと満面の笑みを浮かべた。

「ありがとー。さすがお父さん」

「全く誰に似たんだかなあ」

「お父さん以外の誰に似たって言うのさ。私は生まれたその日から父親に瓜二つと言われて育ったんだから」

ねじり鉢巻をした頭の禿げあがった男に運ばれてきたガラスの器

に入った氷いちごを受け取りながら、ユズリは軽く笑う。ますます渋い顔をした父から視線を外すと若い男が不思議そうな顔をしてユズリ達親子を見ていた。

ユズリはスプーンで氷を崩しながら男を見た。

「名前は？」

男は一拍置いた後、高くも低くもない声で答えた。

「遊佐^{ゆさ}」

「遊佐？ それ苗字？ 名前？」

男は答えない。

それを見てユズリは先程同様の質問をしてきた、あの一つ目の子供と同じく不満に口をへし曲げた。

「何だ。見ない顔だから迷子だと思ったのに」

「ユズリ、お前はまた」

「お父さんの入れ知恵？ 本名を名乗るなっ」

このまま言わせておくと小言が続きそうなので、先に質問をしておくことにする。読み通り父は小言よりも先にユズリの質問に答えてくれた。

「お父さんでなく、こちらはこちらできちんと知っていたよ。この町で名乗ってはいけないと」

「ふうん」

ユズリはスプーンを口に運びながら男に目をやった。

口数も少なければ、表情の変化にも乏しい。年の頃はユズリと同じか若干上といったところだろうから学生か社会人か。髪を染めていないところを見ると、規則のうるさい会社勤めか役所勤めか。否、左耳だけピアスを一っしているからやはり学生か。不躰なまでのユズリの視線にも男は動じない。

表情らしい表情のない顔ではあるが、整ってはいると思う。例えるなら文楽で見た源太^{げんた}の頭^{かしら}を更に線を細くしたようであるし、やはり顔は悪くない部類だろう。少なくとも源太に似ているのなら古典的な美男ではあるはずだ。別に顔が良いから何だと言うこともない

のだが、この町での他人観察は癖のようなものだった。そしてその癖を作る原因、相手をきちんと見ると幼いユズリに教えたのは誰もない、将棋盤を前に座っている実の父親だ。

「で、見ない顔だけどころちゃんとこの町を知ってそうなお兄さんとお父さんは何してんの？」

「ああ、こちらは人を捜しているそうでね」
「へえ」

父はこの町では顔が広い。それこそ幼い時分からここに入出入りしていたというから店の殆どとは顔なじみだし、似たような面子の集まるこの町では自発的にやってきた者と偶然迷い込んだ者との区別もつく。確かに人探しに頼るには適した相手だろう。

「それでタダで教えてやるのは駄目だとか言って、お金を請求したか将棋で三本勝負ってどこ？」

「惜しいな。持ち合わせが足りないとのことで、将棋一本勝負でそちらが勝ったら話を聞くと言うことで話はついたんだよ」

「ケチなお父さんにしては随分良心的だね」

「こちらはお父さんの高校の後輩に当たるらしくてね。お父さんも後輩は可愛いもので親切心が湧いてきたんだよ」

「へえ。で、どっちが勝ったの？」

「さつきから一向に勝負がつかないんだよ。将棋やチェスの類には随分自信があつたんだが、君は若いのにやるねえ」

父は感心したように遊佐と名乗った男を見て笑う。

遊佐は軽く頭を下げた。

「まだまだです」

「そう謙遜することはないよ。正直なところ、こうも楽しい勝負ができるとは思っていなかったよ。随分昔にどこかの元プロ棋士だとか言っじいさんと指して以来のいい勝負だ」

愉快そうに父は言い、遊佐は「はあ」と気の抜けた声で答えていた。

「まあせっかくの楽しい勝負だが、このままでは数時間では決着は

つかないな。君、朝には帰るんだろう？」

「いえ。聞ける事を聞くまではここにいます」

「あんまり長くいると、帰れなくなるよ」

ユズリはかき氷を半分ほど平らげてから、さしたる関心もなく言
った。

「私だつてもう十年以上ここには通っているのに、未だに朝までには
追い返されてるもの」

「ユズリも放っておくと帰れなくなりそうだからね」

父はそう言つて遊佐に向き直つた。

「ここはあまり君達のような子が来るべき場所ではない。迷つてしま
えば何処ぞへ引かれてしまうよ」

真剣みを帯びた父の声に、遊佐は小さく頷いた。

「知っています」

「私だつて知つてる。ああ、あそこのオッサンは迷つたね、引かれ
てる」

ユズリは視線だけを大通りを歩く男に向けた。

仕立ては良いのによれたスーツにネクタイ。恰幅の良い体つき。

伸び放題の髭に目の下の隈は濃い。その手前には派手な化粧を施し、
襟も裾も肌蹴た女が歩いていく。

男のほうは顔も名も、昼の日の当たる世界ではよく知られた人間
だ。特にここ最近ではテレビや新聞を賑わせていたのでユズリの記憶
にもよく残っている。

同様の者は多いらしく、通りのあちらこちらからも声が漏れ聞こ
えてくる。

ああ、迷い込んだか。

見る影もないな。随分図太いおやじかと思えば。

ほら、前を歩く女。あの親父の名前を手に入れた。これであ
の男は女の物だ。

お気の毒。

一体どこに行くんだかなあ。

喧噪に乗って囁き合うような声が耳に届く。

「ああなつてからでは遅いからね」

父の言葉に、ユズリは迷い引かれた男から目を逸らした。

「あんなのと一緒にされるなんて心外」

「人間は脆い部分を衝かれるとことん弱い生き物なんだよ。どんな人間であれね」

妙に大人ぶった物言いをする父の言葉から顔を背け、ユズリは一心にかき氷を口に運んだ。もうほとんど溶けてしまっていてこうなつては最早ただの甘つたるいだけの液体だ。甘さが妙に舌に残つて不快だが、ここで手を止める事は憚られた。

父は父で娘のそんな心情を知つてか知らずか、早々に話の矛先を遊佐へと向けた。

「君も気をつけなさい。私は善人ではないが、そこそこの良心は持ち合わせている。まだ若い君があんな風になつては後味が悪い」

「なりませんよ。俺は引かれぬ。名乗らない」

区切るようにはつきりと、遊佐は言う。

「ここで迷えば静かに死ぬことも出来なくなる。一応その程度の知識はあるんで。だから俺はここでは迷わない。迷い隙が出来れば『悪いもの』が寄ってくる」

「……ああ。ちゃんとこの町のことを知っているのか。珍しいな。君のような若さで。私の子供の頃でも知る人間は随分少なくなつていたのに」

遊佐は答えない。不用意にここで自らに関する言葉を発してはいけないと知っているらしい。

珍しい奴。

ガラスの器の底に残つた氷水を喉に流し込みながら、そう思った。

迷い人、探し人

「おつ、いたいた。シノの旦那！」

人混みを縫うようにやってきたのは、ユズリも顔なじみの町で両替商を営む小柄な男だ。

「公こうがお呼びですよ」

「ああ、もうそんな時間か」

父は到底時計とは思えない数の数字と針が並ぶ懐中時計を見ながら立ち上がり、そして遊佐を見下ろした。

「申し訳ないが私はこれから用があつてね。明日には戻っているだろうが、今日はまだ分からない。急な用事であればその私の娘に相手をさせよう」

「は？」

思わず口に使っていたスプーンを嚙んでしまう。

「何で私が……」

「どうだろうか？ 遊佐君」

「ちよつと人の話を……」

熱くなるユズリをよそに、父は悠然と遊佐を見ていた。

遊佐も遊佐で少し考え込むように目を伏せてから父を見上げた。

「構いません」

「私が構うかどうかのほうが先でしょ！」

「ではユズリに任せよう」

「お父さんっ！」

怒鳴りつける娘から軽く目を逸らして父はぼそりと呟いた。

「お父さんはお前の年の頃には下世話な小競り合いから血生臭い雑事まで、この町の全てを支配する勢いで仕切ったものだつたが、ユズリにはまだ無理だったかな」

「っ！」

「まあ無理と言うなら仕方ない。誰か代わりの者を寄こすでしょう。」

何、私には劣るがユズリよりは優秀な者を連れてくるから安心なさい」

「……ちょっと待とうよ、お父さん」

父の肩に手を置いて、ユズリは身を乗り出した。その裏で父がほくそ笑んだこと、馴染みの両替商が顔を背け笑いを堪えていたことには気づかずに。

「私より優秀な奴がこの町にどれほどいると？ この町じゃ高級官僚だろうと一国の首脳だろうと無力だったのに？」

「そんなお偉い方々でもそうなのに、一介の学生のユズリは何も出来ないんじゃないのかい？」

「私はあなたの娘ですっ！」

ユズリの腹の底からの叫びに、周囲の視線が残らず集まった。だがユズリはそんなことにはまるで気付かない。気づいていたとしても気にするつもりもない。

「つまりいずれは私があなたの地位に就くっつーことですよ。あなた様が泣いてびっくりするくらいに立派に！ 世襲制なんて古臭いけど、私以上にお父さんの次に相応しい人間なんていないんだから！」

「でもユズリは遊佐君の困り事すら処理出来ないんだろう？」

「出来ないんじゃないの！」

「まあ言い訳は何とでも出来るからなあ」

傍からは煽っているとは思えない言葉にも、ユズリはそれはもう正直に反応した。隣で見ている両替商はにやにやと笑いながら、遊佐は親子喧嘩らしきものの成り行きを無表情に見守っている。

「だいたい何で私はいまだに公に挨拶もさせてもらえないのよ！ 私もそんな雑用しないで公に会いに行く！」

「子供の頃に一度会っただろう。頭まで撫でてもらって忘れたのかい？」

「もう記憶も朦朧。決めた！ 私もこれから公に会って、この性悪オヤジの跡はこの私が継ぎますって宣言してくる！」

「何を言ってるんだ。お前のようなひよっこに、公がお会いになるわけないだろう。御多忙な方を煩わせるんじゃない」

「ひよっこって何よ!」

「お父さんから見ればお前はまだまだひよっこだよ。いや、ひよっこにも至らない卵からようやく這い出るか出ないかと言ったところかな」

父の意地悪い言葉と性悪な微笑みにユズリは顔を真っ赤にして肩を震わせた。

「……私はひよっこでなくもう十分に一人前ですっ」

「そうかい？ お父さんにはどうもそうは見えないだが」

「そう！ お父さんは普段の私を知らないからそんないつまでも子供の頃のままの扱いをするけど、私だって」

「よしわかった」

憤然とまくし立てるユズリの言葉を、父は爽やかな笑顔で遮った。
「じゃあお父さんにユズリが一人前になったという証拠を見せてくれ」

「証拠？」

ユズリの訝しげな視線にも父は春風のような笑顔で応える。

「遊佐君の人探しを無事手伝えたら認めてあげよう。その際は公にも、うちの娘は私に似て優秀なようですとお話ししておこうじゃないか」

「っ!」

自画自賛も良いところの発言だと思いつつもユズリはいつものまにか父のペースに巻き込まれ、遊佐とやらの人探しを手伝うことになっているとようやく気がついた。むしろここまで話を運ぶためだけに今までのやりとりがあつたのだと、冷え始めた頭で考えればすぐに分かることになった。もう何度目とも知れぬ敗北感に打ちひしがれながらもユズリは俯いて「わかった」と呟いた。きつと今顔を上げたらこの父はものすごく意地の悪い笑顔でいるだろうから、せめて意地でも顔は上げずにいよう。

父にうまいこと乗せられてしまったことは悔しいが、その見返りを得るためだと思えば我慢も出来る。と言うか、そうとも思い込まねばやってられない。

「さあ話は纏まった。それじゃあ遊佐君。不肖の娘だがこの町については詳しいし、それなりに出来ることも多い。とりあえずはこの子で我慢してくれるかい？　どうしても駄目だったら戻って来た時に私が改めて話を聞こう」

「わかりました」

遊佐が物分かりよく頷くと、それを見て両替商は父に声をかけた。

「旦那。そろそろ」

「ああ、すぐに行くよ。あまり目上の方をお待たせするわけにはいかないからね。ああ、すまないがこの将棋盤を片づけておいてくれるかい？」

両替商が頷くと、父はユズリを見た。

「じゃあユズリ」

「……何？」

子供のように横を向いて不貞腐れたユズリの頭に大きな手が載せられた。ユズリが顔を上げると父が笑っていた。子供の頃よくしてくれたように、頭を撫でながら。

「頑張るんだよ」

「……わかってる」

照れくさくなって再び目を逸らすと、父は軽くユズリの頭を叩いてから両替商と共に雑踏に紛れていった。ユズリは昔から変わらないう父の後ろ姿をしばらく目で追いかけて続けた。

これも癖だ。決して成長していかないわけじゃないと自分に言い聞かせながら、その背をいつまでも見送っていた。

父の背が見えなくなっただけでしばらく経った頃、腹に響くような大太鼓の音が町全体に響いた。それに続き町中の銅鑼ひびが。

この町の時を報せるシステムだ。大太鼓を合図に、町のあちこち

にある銅鑼を鳴らして時を知らせるというもの。

町中の銅鑼があらかた鳴らされた後、更にもう一度大太鼓が叩かれ銅鑼の音が静まった。

「もうこんな時間か」

ユズリは町の中心にある十二階建ての塔を見上げた。この町で一番の高さを誇る建物は町のどこからでも見ることができ、その屋上には常にひとつの大きな炎。その炎は決して消えることはなく、物を燃やすこともない。町で最も高い場所にある炎は時を知らせるためにあるのだ。炎は金色から緋色、赤、紫、青、藍とゆつくりとその色を変化させてゆく。まるで空の色のよう。その色でこの町では時を計る。大太鼓を鳴らす刻限も古来より炎の色を基準にしていると聞いた。そして今、炎は深い藍色に揺れている。

「早くしないとよそでは夜が終わる」

「よそではってことは、ここでは違うのか？」

遊佐が訝しげに訊いてきた。

「ここに普段の私達の常識はないよ」

そう言って無数の灯りの向こうに広がる漆黒の空を振り仰ぐ。

便宜上、この町の人々は限りの見えない闇の世界を夜の町と呼ぶが果たしてそれは正しいことなのだろうか。この町には最初から太陽などない。月も星もない。時はこの町独自の刻み方をし、午がないため午前午後の区別がない。だからここには朝も昼も夕方もない。ただ暗いから、夜のようなだから、夜に外界との境界が開かれるから夜の町と呼ばれるだけだ。

だが外界が太陽に照らされる時間にも彼岸^{ひがしがん}此岸^{ひがん}が存在する以上、その境界であるこの町は消えることなく存在している。決して人の計る昼にこの闇の世界がないわけではないのだ。ただ太陽が昇らないというだけで夜と呼ぶのはあまりに性急だろう。ヨーロッパには太陽の沈まない明るい夜があり、季節によっては日本で夜と呼ばれる刻限にもまだ太陽が照らしている国もある。

ここでいう夜とは絶対的なものではなく非常に曖昧なものだ。だ

がこの世界で言葉は強い力を持ち、世界の理に作用する。故にこの世界を、町を夜と呼んだその日からこの町は夜の世界となったのだ。だからといって、素人にそれを懇切丁寧に説明してやるほど自分は親切ではないし、早々に人探しとやらを終えたいのが本音だ。

ユズリは憮然と遊佐に向き直った。

「人探しだっけ？ 本当にこの町にいるの？」

「多分。この先へ行っていないのなら」

「行ってる可能性はあるの？」

「なくはない。けど多分迷ってる。本人に迷ってる自覚があるかどうかはともかく」

「ここで自覚ある迷子は少ないけどね。あーお父さんに確認頼んでおくべきだったな。でもまたあの親父を頼ったりしたら未熟って言われてバカにされるか」

それは不本意だ。既に乗せられてしまった上に更に助力を求めるなんてすれば、あの父は当然ユズリをからかうネタにするに違いない。

「まあいいや。で、その迷子の特徴は？ 人海戦術。そこら辺の人に聞くのが一番手つとり早いし」

「とりあえずは……赤」

「赤？」

遊佐は頷く。

「姿は分らない。けど多分、高確率で赤い打ち掛けを羽織っている」

「赤い打ち掛け……って、あの時代劇で武家の奥方とかが着物の上に羽織って引きずっている着物？」「それだ。その下にも多分赤い着物を着ていると思う。帯も赤だと思う」

「赤ねえ」

着物の色の合わせについては詳しくないが、普通はもう少し季節に応じてグラーションをつけたり、差し色に別の色を取り入れる物ではないのだろうか。別にそういう法があるわけでもないし、仮

にあつたとしてもこの町ではそういった法は適応されないが。

「それから」

遊佐は心持ち声を低くして続けた。

「柄が赤い柄巻つかまきの脇差わきざしを持っている。多分抜き身だろうな」

「脇差？」

と言うと確か武士が腰に下げる日本刀のうちの短い方のことだ。

その上抜き身ということは刃が剥き出しということではないか。

「ここか先にいなかったら銃刀法違反じゃないの？」

「違反だな」

至つて真顔で遊佐は答えた。そして言う。

「だから探してるんだ」

「……そ」

淡々とした口調なのに、妙な意志の強さを垣間見せる。妙な奴だ。もう一度ユズリはそう胸の内で呟き、ガラスの器を置いて立ち上がった。

「じゃあとりあえずは橋ね」

さてはいずこの異形か

「橋？」

遊佐は座ったまま聞き返してきた。

「橋はこの町の出入り口だから、その目立つ赤い人が出入りしたなら橋番……門番の橋バージョンね。それが覚えているかもしれないから。まあ職務怠慢なことも少なくないけど」

言いながら今日町に入った時、橋番らしき者はいただろうかと思いを辿る。橋番が番人らしい風体でいてくれることはまずない。彼等はただ命じられたまま町に出入りする者を見届けているだけであり、橋が見える範囲にさえいればそれだけで最低限の義務は果たしたことになる。そのため橋付近の飲み屋で酒を片手に番をしているという、昼の世界の常識とは大いにかげ離れた姿もまま見られる。

「今日の橋番が少しは真面目な奴であることを祈るしかないか。…

…ああそうだ、もう一つ」

「何だ？」

「探し人は人？ それとも別の何か？」

遊佐は軽く眉を顰めた。

「人じゃない何かって言うのは？」

「そのままの意味」

そして二人の間に沈黙が訪れる。

その沈黙を先に破ったのは遊佐のほうだった。

「……たとえば幽霊だとか化け物だとか、そういう物は本当にいるのか？」

「何を今さら」

ユズリは鼻を鳴らして辺りをぐるりと見回した。

「見たまんまよ」

そう言ったユズリの視線の先には二足歩行に燕尾服に身を固めた、目も鼻も口もない、つるんとした顔の男。有り体に言うならばのっ

ぺらぼう。少し先には町中を舞う鬼火を捕まえて、顔の半分以上もの大きさがある口でひと飲みをしている子供。

「少なくとも一般人の常識じゃのっぺらぼうが渋谷を歩いていたり、顔半分サイズの口で火の玉をばくばくむしゃむしゃ食べる人間なんていないと思うけどあんたは違うの？」

「……あれは俺の幻覚じゃなかったのか」

「この町にいるのは皆、あんたと同じものを見てるから安心したら？」

「ああ。とうとう頭がおかしくなっただんでなくて良かった」

ユズリの嫌味めいた言葉に、遊佐は張り合いのない言葉と共にひとりで頷いた。

「……」

何だか肩すかしを食った気分だ。

「……じゃ、橋行こう。朝が来たら私は帰るし」

ユズリはばやきながら元来た道を歩き出した。その後を遊佐がついてくる。

「ああ、学生だっけ」

「そうよ。ここに入り浸って留年しましたなんて言ったらお父さんに一生出入り禁止くらうわ。……言つとくけどあんたも帰るんだからね」

ユズリは顔だけで振り返り、遊佐を見た。能面じみた無表情に、ほんの少し不満の色が滲む。

「何で俺も」

「さっきうちのお父さんに言われたでしょ？ 話聞いてなかったの？ ここは得体の知れない奴がそこかしこにいる。隙を見せないように細心の注意を払ったって、僅かな隙を見つけて付け込んでくるようなのがごろごろと。今はまだいいけど、橋が閉じたら今以上に危険な場所になる」

「橋が、『閉じる』？」

訝しげに遊佐が聞き返す。

確かに日本語としては変だ。だが表現としてはこれが一番的確だ
と思うので、ユズリは答えず再び先へと歩き出した。

「この町には橋が複数あるの。その数は私も把握してない。けどひとつ
の世界から繋がる橋はひとつだけ。あんたの探し人があんたと
同じ世界から迷ったなら、その橋を通らずにこの町に入ることはで
きない」

「違う世界は複数あるのか？」

「あるって聞いているけど、実際どうかは知らない。見たことないも
の。ま、あの辺が同じ世界から来ましたって言われても納得は出来
ないけどね」

そう言って、全身を覆い隠すように被った外套の下から二メートル
はあるような爪を覗かせる人物へと視線を向けた。

「確かに」

納得したように答えた遊佐にユズリは不審な目を向けた。

「あんた、一体どれくらいこのこと知ってるの？」

「どれくらい？」

大通りの喧騒の中、ユズリと遊佐だけがそこに縫いとめられたよ
うに立ち止まっていた。

「この町のこと、どんな場所だと認識してるのかって訊いてるの」
少なくとも遊佐は偶然ここに迷い込んだ人間ではないらしい。そ
もそも名を名乗ってはいけないというこの町で一番に身を守る術を
知っていた以上、全くの予備知識もなくここに来たとは思えない。

「ここで名を名乗ってはいけないってさっきうちの親父も言ってた
でしょ。ここで本名を知られるのは命を握られるも同然だから。で、
何でそんなこと知ってるの？ここに留まるつもりがあるなら最低
限の知識はあったほうがいい。そうでなければそこの小狡い連中
に力モにされて二度と戻れなくなる」

「戻れなく？」

「普通に寝起きして遊んだり働いたり勉強したりする、私やあんた
が太陽の下で過ごす世界に」

ユズリはまっすぐに遊佐を見た。

「別に戻りたくないなら止めやしないけど」

「……どうだろう」

遊佐は軽く眉を顰めて呟いた。

「戻りたくない……わけじゃない、と思う。だからと言って、絶対に戻りたいかと言われたら別にそうでもないような」

「はあ？」

あまりに真剣な声音かつ曖昧な返答に、思わず声が裏返ってしまった。

「あんた、何考えてるの？」

意識せず棘々しくなるユズリの声にも遊佐は動じない。ただ能面じみた無表情で答えるだけだ。

「とりあえずは赤い奴を捕まえることを考えてる」

「あ、そう」

つくづくやりにくい相手だ。天然だかボケてるのだからと思えば、聞いたこと全てに答えるわけではない。この奇妙な場所故の警戒心からそうなのか、それともどこへ行くところなのか。

とにかく付き合いやすい相手でない事は確かだが。

こんな付き合いにくい相手とは早々に縁を切るに限る。そのためにも遊佐の言う赤い奴とやらを見つけなければ。

「路地裏とか怪しい情報屋とかに話聞き出せばいいんだけど、あいつら絶対ぼったくりだし」

ユズリは眉間に皺を寄せ、吹き流しを口にくわえて薄暗い店と店の間の細い闇を見やった。

表通りの明るさ、喧騒とは裏腹に少し裏道に逸れてしまえば光が届かない。闇に紛れどのような連中がいるのかもよく知れない。

ユズリが生きてきた十倍以上もの時をその闇と共に暮らしてきたような連中と対等に渡り合う自信もない。父がいるならともかく、せいぜい十年程度通っているだけの小娘と素人同然のわけのわからない男ではうまくぼったくられ偽の情報を掴まされるに決まってい

る。

重苦しい溜め息と共に吹き戻しが伸びる。それがくくると巻き戻ってくると、少し離れた場所から濡れたような声が聞こえてきた。「それ、いいナ」

思わずユズリが身を引くと、路地裏の前に全身を濡らした小柄な人影が立っていた。

水に濡れた重たそうな着物から伸びた手足や頬には鱗が生えていて、口は異様に大きい。右目は潰れ、開いた左目だけでユズリを見ている。年齢も性別もよく分からないがこの薄ら寒い気配は恐らく路地裏の闇の住人だ。

「……何か用？」

迷うな。

付け入る隙を与えるな。

そうでなければ引かれてしまう。

こういう輩と関わるには常に毅然としていなければならない。決して自分を見失ってはならない。

「ソレ、くるくるって、いいネ」

紫の爪が生えた指先が吹き戻しに向けられた。

「くるくる？　吹き戻しのこと？」

「それ、そんな名前なんだ？　いいナ、ソレ。くれたら情報やるヨ？」

「情報？　あんた、情報屋？」

「違うけど、裏側にいると表じゃ聞こえない色んな話が聞こえて来るんだヨ。シノのお嬢ちゃん」

シノは父のこの町での呼び名だ。この奇妙な人物はユズリのことも知っているらしい。

「お父さんの知り合い？」

「何度か情報を買ったことがある。前はベーゴマ……その前はべっこう飴と交換シタ」

金銭ではなく物々交換のタイプか。しかしだとしたら随分と安上

がりだ。

「オレは青目。^{あおめ}シノから聞いたことはないかい？」

「青目……ああ、常にずぶ濡れの気色悪い物知りってあんたのこと？」

「気色悪くて悪かったネ……」

幾分気分を害したように青目はじつとりとした目を向けてきた。やはり気色悪い。口に出すべきではなかったと少し反省したが、反射的に口に出してしまう気色悪さだ。

青目は仕切りなおすように咳払いしてから軽く首を傾げた。

「それでお嬢ちゃんを買うかい？　今ならそのクルクルと交換ダ」「吹き戻しとねえ」

片手に持った吹き戻しと青目とを交互に見比べる。

「そう言えばあんた、何でいい歳してそんなオモチャを持ってるんだ？」

今まで黙っていた遊佐が不思議そうに後ろから吹き戻しを覗き込んだ。

「いいでしょ。たまにはこういう懐かしいものに触れたいの。……」

ま、いいか。また買えばいいし。わかった。これあげるから情報と交換」

「いいヨ。何が知りたい？」

青目の左目がわずかに細められる。

……嬉しいらしい。

「赤い奴、探してるの。詳しい事は、えつと遊佐？　だっけ。あんたが教えて」

遊佐は頷き、青目を見た。

「赤い打ち掛けに赤い柄巻の脇差をもった奴、知らないか？」

「赤い打ち掛けは知らんが、赤い柄の刀を持った奴なら知ってるヨ」

「本当っ？」

反射的に身を乗り出して、青目に詰め寄った。

「本当だとモ。教えてほしければそのクルクルをお寄こシ」

青目は鱗の生えた右手を催促するように差し出してきた。嘘だっ
たらしばき倒してやろうと密かに決意しユズリは吹き戻しを手渡し
た。

それを握りしめ、青目は二カッとう見てもかわいいとは言いが
ない笑みを浮かべた。

「確かに受け取ったヨ。欲しいのは赤い柄の刀の奴だったネ。それ
ならさつき『枝垂れ屋』っていう遊女屋の辺りで騒いでたヨ。随分
激しく刀を振り回してたネ……」

その青目の濡れた声を遮るように、破壊音と悲鳴が少し遠くから
聞こえてきた。

「ああ、あれだヨ。多分ネ。何でも心中したいらしくてネ、店の者
も大慌てダ」

「それは面倒くさそうな奴だこと。とりあえず情報ありがとう」

「またおいデ。シノのお嬢ちゃんに此岸しがんの坊ヤ」

「どうも」

そう答えている間にも破壊音と甲高い悲鳴が町中に響き渡ってい
る。

「俺は坊やって歳じゃないけど、一応ありがとうって言うべきか？」

「何かしてもらったら礼を言ウ。共通の礼儀だヨ。君のは正解ダ」

「そうか。ならよかった」

「とろくさいことやってないで、さっさと行くわよ」

「気をつけてお行キ」

吹き戻しを握った手で青目は軽く手を振り、ペタペタという濡れ
た足音を残し路地裏の闇に消えていった。

ユズリは遊佐を見上げた。

「心中したい奴だって。あんたの探してる奴？」

「さあ？ でも刀振り回してるなら可能性はある」

「……どんな危ない奴よ、それ」

ユズリはげんなりと答え、遊佐と共に破壊と悲鳴の中心へと向か
った。走るべきなのかとも思ったが当の遊佐に走る気はないようだ

ったのでやめた。

この町の人々は基本的に他人に無関心だ。そのため自分に害が及ばぬ限り、目の前で他人がどのような目に遭っているように気にも留めないことも珍しくはない。

だからだろう。今も遠くから悲鳴だ怒声だは聞こえてくるが、道ですれ違う人々はさしたる興味もないようだ。たまに何事かと顔を上げる者がいる程度で、それ以上騒ごうとする者はいない。

「変な場所だな」

辺りを見て、遊佐が呟く。

「化け物はいるし、金の代わりにオモチャを請求してくる奴はいるし、ファザコンはいるし」

「……ちよつと待って。最後のファザコンで誰のこと？」

ユズリが遊佐を睨みつけて振り返ると、彼は飄々とした調子で答えた。

「そこで怒るってことは、わかってるんだろうに」

「やっぱり私のことか！ 誰がファザコンなのよ！」

「お父さんお父さん言ってるところが」

一切の迷いなくきっぱりと言い切られると、怒るこちらが間違っているのではないかという気すらしてくるから恐ろしい。だがここで否定しなければ負けだ。否定しないという事は肯定しているも同然だ。

「私はファザコンじゃないわよ。一応あんな性悪オヤジでも尊敬してるの。この町でお父さんに逆らえる奴なんていないんだから」

「その父親を褒めそやすあたりが小学生臭いと言つか何と言つか」

「違っつつってんでしょ！ これだから素人は！」

何て忌々しい奴。揶揄めいた雰囲気はなく、能面のような無表情で言ってくるから余計に腹も立つというものだ。

「うちの父親はあれでこの町の管理をしてるの！」

「ああ、そんな噂は聞いた。この町に一番精通してるって噂を聞いてそれで会いに行ったんだからな」

「そう、凄いの。この町の管理なんてそんじよそこらの奴には出来ないんだから」

「それで立派な父親を持ったあまりファザコンになったと……」

「ファザコンじゃないつつてんでしょ！　しまいにや微塵切りにするわよ、この能面野郎！」

「どんな脅し文句？」

この無駄な冷静さがどうにも神経を逆撫でしてくる。

（冗談抜きで微塵切りにしてやりたい……っ）

人間でなかったら絶対にそのまま五寸刻みにしてやると言つのに。何故こんな奇っ怪な輩が人間なのか。むしろ妖怪の類だろう、この能面野郎は。

だが悲しいことに、遊佐はどう見てもどう考えても町に跋扈するはつこいわゆる異形とは異なる。外見も気配も紛うことなく人間のそれだ。一体どこでどのように育てばこんな珍妙な奴が出来上がると言うのか。少なくともユズリは生れて十八年、遊佐ほど奇妙でわけのわからない人間に出会ったことは一度もない。

「あ」

「何よっ！」

「あれ」

淡々とした遊佐の口調と同時、ユズリの長い髪を掠めて背後に何かが落ちてきた。

そう思った瞬間、耳を覆いたくなるような破壊音が辺りに響き渡った。

娘、刀狩り

「なっ、何だいっ!？」

破壊音の元となつた店から強面の老婆が出てきて悲鳴を上げる。

老婆の視線の先には土煙と店に空いた無残な大穴とその残骸。更には穴を空けた物体と思われる、完全に意識を失っている筋骨隆々の男。

「何こいつ、どこから降ってきたの？」

「あっちから」

こんな時まで冷静に遊佐は左斜め六十度ほどを指差した。

「あっちって……確か枝垂れ屋の方？」

いつの間にか悲鳴が近づいてきているのは気のせいではないだろう。

「赤い柄巻の刀を持った奴のお出まし？」

「向こうから来てくれるのか。親切な町だな」

しみじみと言つてのける遊佐の言葉は本気が冗談かわからない。

ただ確実なのは、悲鳴と破壊音は確実にユズリと遊佐の元まで近づいてきているということだ。そしてその破壊音は道を曲がって二人の前までやってきた。

「どけどけえっ!」

野太い声と共に、赤い袴纏はんてんが肌蹴た髭の濃い、禿げた頭を中心にだけ髪が生えた男が太い右手で短刀を振り回し、左腕では女を抱え込んでいる。その女が細い手を必死に伸ばして泣き叫ぶ。

「た、助けてえっ!」

男の腕に繋ぎとめられた女は濃い化粧に黒地に毒々しい花が描かれた着物を纏い、一目で遊女と分かる風体だった。

「……赤い着物着て、赤い柄の刀。こいつ？」

遊佐に視線をやると、遊佐は落胆したように首を横に振った。

「確かに柄は赤だけど違う。あれは脇差でなく短刀だし、俺が探し

てる奴はあんな赤茶色の柄巻でなくもつと真つ赤なやつ。そもそもあれは打ち掛けじゃない」

「何だ。せつかく吹き戻しと交換で情報買ったのに」

「そんなにあのオモチャが大事だったのか？」

「うるさいな。私は物に対する執着心が人一倍なの」

話のずれこんだユズリ達の会話を見かねたように髭の男が声を張り上げた。

「おい！ お前らも俺の邪魔をする気か！」

「た、助けてって言うてるだろお！？」

「あーもう何よ、心中騒動がどうのこうのってあんた達のこと？ 心中ならもつと人の迷惑にならないところで静かにひっそりやるのが礼儀でしょ」

ユズリは胸を張って仁王立ちになって怒鳴りつけた。

「いい大人が人様に迷惑かけてんじゃないわよ！」

「え、そういう問題なのか？」

遊佐のささやかなツツコミを無視してユズリは男を見据えた。

「あんまり騒ぎが過ぎると出入り禁止にされた揚句に、『引かれ』るわよ」

ユズリの小娘らしからぬ低い声に気圧されたのか、遊女を抱いたまま男が一步退く。その間合いを詰めるように、ユズリも一步前へ出て更に低い声で問う。

「おまけにそつちのヒゲ。あんた、向こうから逃げて来たわね？」

男の顔があらさまに動揺を映した。

「私の目は誤魔化せないわよ。これだけ騒ぎを起こせば、向こうもあんたに気づいてるはず。もうあんたはどこへ逃げても無駄よ」

「う、うるせえっ！ 俺はミヤとどこまでも逃げてやらあっ」

「アタシは嫌だって言うてんだろ！ お離しよっ」

「ミヤ！ お前俺と添い遂げたいって言ったじゃねえか！」

男はとうとう刃を遊女へと向けた。遊女は小さく悲鳴を上げたかと思うと、自棄になったように叫んだ。

「そ、そんなの！ 客相手の手管に決まってるだろ！ 誰がお前みたいなのと添い遂げるかいっ」

「ミヤ……おめえ……！」

「女に入れ込みすぎると破滅するぞ」

静かな声で言っただのはずっと傍観していた遊佐だった。

騒いでいた男女とユズリは同時に遊佐を見た。彼はやはり無表情だったが、今まで以上に冷たく無機質な、血の通っていない人形のような顔で淡々と続けた。

「まあ色恋で周囲が見えなくなるような奴なら、さっさと破滅してくれたほうが周りにはありがたいけどな」

「なっ、てめえっ！ 餓鬼が知ったような口を聞くんじゃねえっ」

男は顔を真っ赤にして、刃を遊佐に向けた。

「……こういう手合いは正論述べると逆ギレする傾向にある。どうすんの？ オッサン一人放り投げちゃうような怪力相手に」

ユズリは顔を顰めて遊佐から視線を外した。

「別にどうも。なるようになるんじゃない？」

「何っー無責任な……」

溜め息を吐いて、ユズリはしゃがみ込んで壊された店先から転がり出た商品を物色し始めた。

「あんたはあんたで何してるんだ？ こんな時にフリマ気分？ 何かいい物でもあったか？」

「いい物選んでるのよ」

遊佐に背を向けたまま、ユズリは壊れた店先を見て怒りに震える老婆に「これ借りるから」と言っただけで立ち上がった。

「この糞餓鬼どもっ！ 俺を無視すんじゃない……」

「器物損壊、傷害、無理心中未遂と言うか殺人未遂……まあここじや罪状はつけられないんだけど。でも向こうからの逃亡っただけでこの町では重罪だけどさ」

ユズリは薄く笑い、選びとった『いい物』を握った。

「今すぐ遊女の姐さんを離して、その短刀を捨てて戻りな。お迎え

が来る前に自主的に戻ればまだ少しはお目溢し願える」

「ふざけんなっ！ 餓鬼はすっこんでろ！」

「……人が親切で言っただけなのに」

つい眉間に皺が寄る。やはり慣れない親切などするものではないらしい。

「せっかく私も目溢ししてやろーと思ったのに」

「おめえみてえな糞餓鬼に目溢しもらうほど俺は落ちぶれちゃ……

！」

「あ、そう」

不機嫌に呟き、ユズリは先程店から借りた『いい物』を握る左手に力を込めた。それは古道具屋を営む、今は無残に穴が開いた店先に飾られていた太刀だ。

「こんな無法地帯っぽい町だけど、その時々管理者と住人代表達の間でルールが作られることもある。今のルールのひとつに無認可者の抜刀を禁ずっているのがあってね」

ユズリは口角を上げ、柄と鞘を握るそれぞれの手に力を込める。

「その無認可者抜刀禁止の取締りに、私もたまーに協力しているわけよ」

そして一步踏み込む。音もなく黒塗りの鞘から引き抜かれた鋭い銀の光が男へ向けて一閃。カチンと音を立て、銀の刃は鞘に納まった。

一瞬の間を置き、遊女の悲鳴が路面に響き渡った。

「きやああああっ！」

その場に座り込んだ遊女は涙を流し震えている。だが彼女を捕えていたはずの男の腕はおろか、男そのものが姿を消していた。男が握っていた短刀だけが地面に音を立てて落ちた。

「うるっさいなー。あんたは斬ってないよ。斬ったのはこいつの頭の葉っぱ」

そう言っただけユズリは歯の根も合わぬほど震える遊女の隣に転がっている、狸とも狐とも熊ともつかぬ大型犬ほどの赤い毛並みの動物

の尾を掴んだ。

「何だそれ？ 狸？」

遊佐はユズリの隣に立ってその奇妙な毛深い獣を見下ろした。

「さあ？ どつか別の世界の化ける奴でしょ？ けど頭に葉っぱ載せて人間っぽい感じに化けるあたりは狸とか狐っぽいかな」

「ああ、化けてたのか。もしかしてあのハゲ頭を中心に残ってた髪が葉っぱ？」

「そう。それでこの不細工な動物がこいつの本性」

気を失っているのか、元男であった獣はぴくりとも動かない。

「死んだのか？」

「ここで死ぬ奴なんて、いるわけないじゃん」

「そうなのか」

「ここは死んだ奴と生きた奴の狭間の町だもの。死ぬのはこの先でユズリはそう言って鞘に納めた刀を店主である老婆に返した。

だが鞘を見た老婆は「油汚れがついた」と文句を言い始め、「不可抗力だ」「買い取れ」の押し問答がしばらくその店先で繰り返されることとなった。

「指紋なら拭き取ったでしょ！ ほら！」

「馬鹿お言い！ ここんとこをご覧！ 傷がついてるじゃないか！ 弁償おし！」

「そんな小さい傷、最初からついてたんでしょ！ ぼったくるつもり？」

「喧しやー小娘っ！ アタシの目は欺けないよ！ …… そっちの小僧も何やってんだい！ 売り物に勝手に触るんじゃないよ！」

般若のような顔の老婆の先には、店先に未だ散らばる売り物をいじっている遊佐の姿があった。

「ちよつと何してんのよ。あんた泥棒か何か？」

「盗む気はない」

「盗む気はないって、どう見たって泥棒じゃ」

「あんた達揃ってコソ泥かい！ 番所に突き出すよ！」

「だから私は借りただけだって言ってるでしょ！」

老婆の怒りの矛先が再びユズリに向けられた時、間近で重い金属音がした。

「え？」

それは短い筒だ。細い鉄の筒。火薬の匂いが鼻につく。

「……あんだ、何してんの？」

ユズリは鉄の筒　火縄銃を彼女と老婆に向け、無表情のまま両手で構える遊佐を見た。

遊佐は答えず銃の火蓋を切り、引き金に指をかけた。

「ちよっ！」

頭が混乱してどう行動したらいいのかわからない。

ただその銃口は確かにユズリと老婆に向いていることだけは確かで、老婆はその場で腰を抜き、ユズリも混乱すぎて手足も動かない。

それでも淡々と、遊佐は引き金を引こうとした。

「動くなよ」

そう低く呟いた遊佐の声は、鼓膜を突き破るような破裂音に掻き消された。

空に、町に響き渡った爆音と白い煙と共に、弾丸は放たれた。

弾はまっすぐにユズリと老婆のすぐ横を通り抜け、いつの間にか意識を取り戻しユズリへと襲い掛かるうとしていた赤い獣へと向かい、その鋭利な爪を砕いた。

爪を弾丸によって折られ、耳障りな悲鳴を上げながら獣がのたうちまわっている。

「……え、何……アレを狙ったの？」

呆然とユズリが尋ねると、遊佐は軽く眉根を寄せた。

「他に何を狙ったと？」

「……いや、だってこっち向いてたし、あんだ何も言わないし……て言うか、あの獣が襲ってきてるよって一言言ってくれればいいじゃない！」

「珍しい火縄銃だなと思つて見てたら偶然あいつが起きるところを見たから。あーこれは危ないなと思つて黙つて作業してた。あそこで襲つてくるなんて言つたら逆上してもつと面倒になるかと思つて」

どこまで嘘か本当かもわからないような口ぶりで遊佐は言う。もう少し悪びれるなり怒るなりすればこちらとて礼を言つたり更に怒つたりと出来るもののに、こう薄い反応では何も言えなくなる。

二の句が継げなくなったユズリは腰を抜かした老婆を見やり、更に後方で先程からずっと立ち上がれずにいる遊女を見て自分も崩れるように座り込んだ。

「びつくりした……」

「火縄銃は響くからな」

どうやら遊佐は、ユズリが銃口を向けられてあまつさえ自分のすぐ隣に向け発砲されたから驚いているのではなく、火縄銃の発砲の爆音に驚いていると思つたらしい。色々と怒鳴りたいところだがそんな気力も削がれた。

「そう言えばあんた、何で火縄銃なんて撃てるのよ。私なんて目の前に実物置かれたつて撃ち方わかんないのに」

あまりに恨めしくて、未だ薄らと煙を吐いている火縄銃すら憎々しく見えてくる。

「ああ、昔からじいさんが砲術をやってたから」

「砲術？」

「火縄銃とか使つた射撃術。じいさんが撃つところとかを昔からこつそりと見てたんだよ。じいさんはあまり人前で修練するのを嫌つてたけど、俺が見ているのは気付かなかつたらしくて見放題だった」
そう言つた遊佐が、無表情ながらも僅かに得意げに見えてますます力が抜けた。

「……見事な腕前だったよ。一步間違つたら私に直撃してた気もするけど」

「そんなへマはしない」

「そう」

「あんたも見事だった」

「何が？」

「居合か？ 一瞬だった。凄いな」

余計な表情がない分、遊佐の言葉は真実味が重い気がする。本気で褒められたのだと思えば悪い気もしない。

「私も昔、居合をやったことがあるから」

ユズリは立ち上がってスカートについた砂を払った。

「ほとんど自己流だけだね。ここはこういう場所だから、どちらかと言うと実践で鍛えられた」

「へえ。楽しい所だな」

ただの物騒なところだろうとも思うが、嘘や揶揄の気配は感じられないので褒め言葉として受け取っておくとする。極度の変わり者というのはいるものだ。

「……さて。これからこの獣を番所に連れてって、枝垂れ屋に事情説明に行つて、この落ちてきたおっさんをどうにかして。それから改めてあんたの人探しに付き合つて……色々やらなきゃね」

「その必要はないよ」

柔らかな声に振り返ると、そこには人の好さそうな笑みを浮かべた父が立っていた。

「お父さん！」

「怪我はないかい？ ユズリ。遊佐君も」

「大丈夫。それよりここで何してんの？ 公と話があつたんじゃないの？」

「その話のひとつが、お前達が収拾をつけたその獣のことだったんだよ」

笑いながら父は爪を折られ、再び気を失ってしまった赤い獣を見下ろした。

「公から無闇な殺生を犯した獣の魂がひとつ、この町に逃げ込んだようだから見つけたら捕縛して連れ戻してくれと頼まれてね。少々凶暴な性質だから気をつけるようにと言われたんだが」

父の目が獣の折れた爪に向けられる。

「問題なかったようだね」

「……まあね」

父は遊佐と違い、常に笑顔だからか却って言葉を疑いたくなる。
読めない性格だからというのもあるのだろうが。

ユズリは獣が振り回していた短刀を拾い上げ、父に見せた。

「無認可で振り回してたから刀、狩つといた。どっかからの盗品だ
と思うけど」

「ああ、ご苦勞様。ユズリは本当に刀狩りが好きだね。今年に入っ
て十七振り目の刀だ」

「私のおかげで無認可抜刀者が減ってるんだから感謝してよ」

「しているとも。それに遊佐君にもね」

「俺も？」

遊佐は不思議そうに訊き返した。

父は頷く。

「その獣の折れた爪は君が持っている火縄銃で折ったものだろう？」

ユズリは少しばかり詰めが甘い所がある。フオーンしてくれて有
難う」

「詰めが甘いつて何よ、お父さん！ 別に私ひとりでも問題なく…

…」

「それは公の前でも胸を張って言えるかい？」

父の必殺、絶対零度の笑顔を前にユズリは渋々顔を逸らした。

「イイエ。この男に……」

「ユズリ。ちゃんと人様は名前で呼びなさい」

柔らかな父の叱責にユズリは懺然としながらも言い直す。

「遊佐に助けられた」

「そうそう。嘘はよくないよ」

父は楽しげに笑い、それからしばらくして駆け付けた番所の者達
に獣を捕らえさせ、遊女からも事情を聴くよう指示を出した。更に
ユズリと遊佐が使った刀と火縄銃は買い取るということで老婆と話

をつけ、破壊された数件の店などについての話をしているうち、町
の中心で輝く炎の色が薄い藍色になっていることに気がついた。

「もうじき朝が来るね。ユズリと遊佐君はもう帰りなさい」

「まだ少し時間はあるじゃない。遊佐の探し人とやらの情報も全然
掴めてないし」

「俺は見つかるまで帰る気はないです」

「駄目だよ。帰りなさい」

ユズリと遊佐の言葉を笑顔で一蹴し、父は言った。

「遊佐君の探し人については私も手を尽くそう。だから今は帰りな
さい」

「お父さんが？ 私ひとりにやらせるんじゃないの？」

「公に遊佐君の話をしたんだよ。そうしたら上の方々も手を貸して
下さると仰っていたから、直に見つかるだろう」

「公が？」

「お優しい方だろう？」

につこりと穏やかな笑顔なのになぜか冷たく感じられる雰囲気
をまき散らし、父はそれ以上言わせなかった。

「お前たち二人が昼も夜もなくここに滞在し続けて闇雲に探すのと
上の方々が手を貸して下さるの、どちらが効率が良いか、ユズリな
ら分かるだろう？」

そう言われては反論出来ない。ユズリに出来るのは頷くことだけ
だ。

「そういうことだ、遊佐君。また夜に来なさい。橋が開いている時
間ならここへ来ることは何も言わないが、閉じている時間に生身の
君たちがここにすることは好ましくない」

遊佐は表情なく父を見ていたが、反論を述べることなく頭を下げ
た。

「……わかりました。よろしく願います」

「ああ。それでは二人ともお帰り。橋までは送っていけないが、ユ
ズリがいるから大丈夫だね？」

「当たり前でしょ?」

「そうか。じゃあユズリ。昼の世界を、お前が本来生きるべき場所を疎かにするんじゃないよ」

「わかってる」

父はユズリの頭を撫で、「気を付けてお帰り」と言って番所の者達とその場を後にした。

「……帰るよ」

ユズリは遊佐を見上げ、先を歩き出した。遊佐も黙ってその後に従う。

町は既に、獣の起こした騒ぎなど忘れたかのように常の賑わいを取り戻していた。

そして今宵は閉幕

柳が生えた橋を前にして、ユズリは遊佐に念を押すように言った。
「橋を渡つて最中は絶対に後ろに振り返っちゃ駄目だから。振り返ったら引かれるから」

「また『引かれる』？」

遊佐がうんざりしたように言った。

「ここで一番危険なのは『引かれる』ことなの。イザナミやらヨモツシコメやらに追いかけられるような目に遭いたくなければ、前だけ向いて橋を渡る」

「古事記？」

「よくわかつたじゃない」

振り返らずに答え、ユズリは先に木製の橋へ踏み出した。橋の対岸は靄がかかったようではんやりとした灯りしか見えない。

「ここは黄泉比良坂よみつひらなか？」

「似たようなものよ。坂でなく橋だけ」

遊佐の足音を背後に聞きながらユズリは答えた。少しの間を置いて、遊佐はひとりごちるように言った。

「……ばあさんが昔言ってた。この世のどこにもない町があるって」

「あんたの情報源はそれ？」

「ああ。そこには生者も死者も、物の怪もあらゆる物があるって。まさか本当にそんな場所があるとは思わなかったしそんな物がいるとも思えなかったけど、本当だったんだ」

「……あそこはあの世とこの世の境界なの。三途の川みたいなものね。ずっと昔は川だったらしいけど、いつの間にか住みつく奴が出てきてあんな町になったって聞いた」

「じゃあユズリの言う町の『先』にあるのは、やっぱりあの世のことか？」

「呼び捨て？ 別にいいけど。……そう。あの赤い獣は冥府から逃

げ込んだ奴。それで遊女に入れ込んでるなんて余裕あるわよね」

鼻で笑うと、背後で遊佐が立ち止まる気配がした。

「俺は生きてるとか死んでるとかあそこにいた限りじゃわからなかったけど、もしかしてお前の父親は」

「八年前に死んでるよ。お父さんは」

決して振り返らず、橋の真ん中に立ち尽くしたままユズリは言った。

「生きているうちから町に足を踏み入れることが出来る人だったし、私もそれが出来た。あんたや私みたいに生きてるうちにあの町に足を踏み入れられる人間って珍しいんだけどね。まあたまにいるのよ」
軽く息を吐き、ユズリは続ける。

「死んでからお父さんはあの町の管理者みたいなことをやってる。そういう役職に就いたみたい」

「死んでも役職があるのか」

呆れたような遊佐の声がかり、ユズリは苦笑した。

「うちのお父さんは特殊なのよ。普通は死んだらそれっきり。……ま、私も詳しくは知らないんだけど。守秘義務だとか言って、教えてもらえないし」

溜め息と共に吐き出してから、ユズリは再び歩き始めた。

「だから私は本当は、町へ来る事を良しとはされないのよね」

「……生きている人間は普通行かないところだから？」

ぼつりと遊佐が言う。

「ご明察。お父さんは私が死の恐怖を忘れることを嫌がっている。死んだらもうそれでしまい。二度と動かない、しゃべらない、その人と関わることは出来なくなってしまう……私とお父さんも本来ならそうでなければいけないところを、私は度々あの町に顔を出してるから、お父さんとも生きていた頃と同じように接してるから……」

「……」
「死んだ人間を求めるものだ。置いて行かれた人間は」
静かな声が川のせせらぎに溶ける。

ユズリは頷いた。

「私もそうだった。もう二度と会えないってお母さんに言われて……信じたくなくて。でももしかしたらこの町に来たら会えるんじゃないかって思ってた……そして会えた。お父さんは、いた」

自然と声は震え、小さくなっていく。

「再会して泣いた娘にあのオヤジ、何したと思う？　まずは一発頬をはたかれて、帰れって言ったの。ここはお前が来るところじゃない、って……」

「……」

「四年、出入り禁止だった。橋番がどうしても私を町に入れてくれなかったの。二年前からは三ヶ月置きならって条件付きで許されたけど。でも一年前にお父さんの上役に当たる人に、いずれ私も町の管理人になれる可能性があるからってことで自由に入れるようになったけど本当のところ、お父さんはまだ不満みたい」

そして最後の一步を踏み出し、橋を渡り切る。

「……少しは分別つく年齢になって、あちらの町ばかりに入り浸ってこちらの世界を疎かにしないっていう条件付きではあるけどね。刀狩りしたりとか、お父さんの下でバイトしてる感じでもあるから呑気に親子でお茶してってわけにもいかないけど」

少し遅れて遊佐もまたユズリの隣に並ぶ。

気付けば振り返った橋は木製からコンクリート製へと変わっていた。黒一色だった空は薄い群青色に染まり東の空は金色がかったごく薄い赤、東雲色しのめに。

朝だ。

「だけど何度町へ行っても帰ってくると思う。ああ、お父さんはもう死んだ人なんだってどうしても思い知らされる。この世界にお父さんの居場所はなく、太陽を浴びて心地いいと感じる私の生きる場所はこちら側なんだって」

「……複雑、だな」

「もうお父さんと私は違うってことを忘れないためにはそのほうが

いいのは分かってるけどね。でもまだ少ししんどいかも。……あんたは、遊佐は平気なの？」

日の当たる世界で初めて遊佐の顔をまともに見た。その顔はやはり源太のようで、表情らしい表情などない。

「あんたは探してる人、見つけた時に割り切ることが出来るの？」

あの町に紛れることが出来るのはごく稀な者が死者、或いは死に近い者だけだ。遊佐は探し人が迷っている可能性があると言った。あの町の向こう……あの世に言っている可能性がある。町の先にあるモノが何かを理解しても、前言を撤回したりはしない。つまり、彼の探し人はそういう者なのだろう。

遊佐とその人物がどんな関係のものなのかを詮索する気はない。けど彼はこの日の当たる世界を置いてもあるあの町で探そうとした。それだけの執着を持つ相手だということだけは考えなくてもわかる。

「割り切れる」

遊佐は静かに、だけど強く言った。

「あれはそういうモノだって、分かってるから」

その言葉の裏に隠れるのは、決意か諦めか。

「……そう」

ユズリは遊佐から視線を外し昇り始めた太陽の下、夜だけの町など影すらも見当たらない川向うの古い町並みを見た。

「なら手伝う。あんたの探し人を見つけるの。ご褒美もあるし」

「……無償だったら手伝う気ゼロと？」

「さあ。その時の気分次第？ ま、一応助けてもらったことになってるから借りは返すわよ」

ユズリは遊佐を見上げて強気に笑った。

「あそこはいずれ私が管理すべき町だもの。探し人の一人や二人、すぐにでも見つけてやるわ」

そして彼の前に右手を差し出す。

「……期待している」

遊佐は差し出された手を握り、小さく答えた。その時の遊佐が日

の下で微かに笑って見えたのは気のせいか、そうでないのか。

「大いに期待しているがいいわ」

明るい光の下、ユズリは強く握手した手を握り返した。

そして一つの夜が明けた。

了

そして今宵は閉幕（後書き）

ここまでお付き合いくださってありがとうございます。

原色の万華鏡のように目がくらみそうで、どこか不気味で懐かしい世界を書きたいと思って書いた話がこの迷い夜行です。

この話は昨年夏に某携帯小説サイトで書いたものなのですが、これを携帯の画面で読めというのは随分ひどい書き手だったなあとうるなながら思っています。

今回こちらで再度載せさせて頂くにあたり、文章は若干変えたりしましたが、基本的な内容は変わっていません。結局遊佐の探し人は？ という感じなのですが、企画連載モノにしようと思っていたので次につなげるような話にしようと思ったものでこういう形でこの話は終わっています。

携帯小説サイトではあまり人様受けしなくて申し訳なかったのですが、まだ続きは全く書いていないのですが、私自身はこの迷い夜行の世界をえらく気に入ってしまって、ユズリや遊佐、その他今回は出せなかったキャラクターなど書ききれなかったエピソード（現在お蔵入りとなっていますが）いずれこちらのサイト様で書ければなど目論んでおります。

もし日の目を見る機会がありましたらぜひまたお付き合いいただければ嬉しいです。

2010・2・8 初瀬こより

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6291j/>

迷い夜行

2010年10月8日11時52分発行